

シンポジウム 1 : ラパロ・ロボット時代の開腹手術をどう指導するか

ラパロ・ロボット時代における
若手泌尿器科医の開腹手術に対する意識調査

川崎医科大学泌尿器科

宮地 禎幸*

抄録：

若手泌尿器科医の開腹手術に対する意識や技術習得に対する意欲を理解するために、日本泌尿器科学会岡山地方会に所属する後期研修開始 10 年未満の泌尿器科医師を対象に郵送によるアンケート調査を実施した。43 名 (58.1 %) から回答を得た。年数を問わず、86 % の医師が開腹手術に自信がないと回答した。今後医学が進歩しても開放手術が存続すると答えた医師は 76 % であり、開放手術習得プログラムがあれば希望する医師が 90 % 以上を占めた。

(西日泌尿. 87 : 117-118, 2025)

キーワード：開腹手術，腹腔鏡・ロボット支援手術時代，アンケート調査，若手泌尿器科医

本シンポジウムにおいて、指導される側としての若手泌尿器科医の開腹手術に対する意識や技術習得に対する意欲，そして現在の指導体制に対する意見を知ることが重要と考え、若手泌尿器科医を対象にアンケート調査を実施した。

方 法

対象は日本泌尿器科学会岡山地方会名簿から後期研修開始 10 年未満の泌尿器科医師 74 名を抽出し、郵送による無記名のアンケート調査を実施した。経験年数を 5 年を境に 2 群に分け、両群の比較にはカイ 2 乗検定を用いた。

結 果

回収率は 43 名 (58.1 %) で回答者の性差は男性 42 名、女性 1 名であった。泌尿器科医としての経験は 5 年未満/5 年以上は 19/24 名であった。泌尿器科専門医は 18 名 (42.8 %)，腹腔鏡技術認定医は 8 名 (18.6 %)，ロボット支援手術の術者経験がある医師は 22 名 (51.2 %) であった。勤務先の状況は腹腔鏡手術導入済み，ロボット支援手術導入済みはそれぞれ 95 %，88 % であった。

開腹手術術者としての自信があると答えたのは 5 年未満で 1 例 (5.3 %)，5 年以上で 5 例 (20.8 %) であった (Fig. 1a)。開腹手術の経験数は術者，第 1 助手のい

れも 2 群間に差を認めた (Fig. 1b)。現在の自身の泌尿器科医としてのキャリアに対して開腹手術の経験数がふさわしいかという質問に対しては両群共不足していると答えた医師が多かった (Fig. 1c)。もし開腹手術習得のプログラムがあれば全員取得か希望する医師だけでよいかの問いについてはいずれの群もほぼ半数ずつに別れた (Fig. 1d)。また，習得については基本的なものでよいという回答も含めて 90 % 以上とほとんどの医師が希望した (Fig. 1e)。

また，最後に「近い将来 (10 年くらい先と仮定)，泌尿器科領域における開放手術はどのように変化すると思いますか」という質問に対して「ロボット支援手術のさらなる進歩，普及そして AI や遠隔医療などの導入によって，開放手術はほぼ不要になる。」という問いに肯定的な回答が 41 %，「開放手術は限定されるが必要性は逆に重要となり，サブスペシャリティとして存続する。」という問いに肯定的な回答が 76 % であった。

ま と め

地域の限定，少数の意見とサンプルの偏りが存在するが，若手医師は開放手術の経験数が少ないことを憂い，多くの医師が医学の進歩があっても開放手術は存続すると考え，開放手術の習得にプログラムがあれば，積極的に参加することを望んでいることがわかった。

* 〒701-0192 岡山県倉敷市松島 577

TEL 086-462-1111, FAX 086-463-4747

E-mail miyaji@med.kawasaki-m.ac.jp

受付日：2025 年 1 月 27 日

受理日：2025 年 2 月 4 日

a. 開腹手術の術者として自信はありますか

$p = N.S.$	非常に 自信がある	ある程度 自信がある	あまり 自信がない	まったく 自信がない
5年未満 (n=19)	0	1	7	11
5年以上 (n=24)	0	5	12	7
全体 (n=43)	0	6	19	18

b. 開腹手術の経験を教えてください

開腹手術：開放での腎細胞癌（部切含む）、上部尿路癌、膀胱癌、前立腺癌の根治術

b-1. 執刀医経験数

$p = 0.0003$	10例以上	3~9例	ほとんどなし	まったくなし
5年未満 (n=19)	2	0	3	14
5年以上 (n=24)	10	8	3	3
全体 (n=43)	12	8	6	17

b-2. 第1助手経験数

$p = 0.0037$	50例以上	49~30例	29~10例	10例未満
5年未満 (n=19)	1	0	5	13
5年以上 (n=24)	3	9	7	5
全体 (n=43)	4	9	12	18

c. あなたの開放手術の経験はどの程度あなたの泌尿器科医のキャリアにふさわしいものですか。充足の度を教えてください

$p = N.S.$	十分足りて いる	どちらかとい えば足りている	どちらでも ない	どちらかとい えば不足	明らかに 不足
5年未満 (n=19)	1	1	4	4	9
5年以上 (n=24)	0	3	6	9	6
全体 (n=43)	1	4	10	13	15

d. もし、開放手術の習得のプログラムがあれば、運用についてどう考えますか。もっとも近いものを教えてください

$p = N.S.$	専門医取得前に 全員に課すべき	希望する医師のみが 受講する	よくわから ない
5年未満 (n=19)	7	9	2
5年以上 (n=24)	12	11	1
全体 (n=43)	19	20	3

e. あなたにとって開放手術の習得についてどう考えますか。もっとも近いものを教えてください

$p = N.S.$	是非とも 取得したい	緊急時に対応できる基 本的なものでよい	強くは 望まない	よくわから ない
5年未満 (n=19)	9	7	1	1
5年以上 (n=24)	18	4	1	1
全体 (n=43)	27	11	2	2

Fig. 1 主たる質問票の質問と回答の集計結果

N.S. : not significant

SURVEY OF YOUNG UROLOGISTS' ATTITUDES TOWORD OPEN SURGERY IN THE ERA OF LAPAROSCOPIC AND ROBOT-ASSISTED SURGERY

YOSHIYUKI MIYAJI

Department of Urology, Kawasaki Medical School, Kurashiki, Japan

Abstract

The questionnaire was mailed to young urologists affiliated with the Okayama branch of the JUA, and 43 responded. Over 80% of doctors responded that they were not confident in open surgery. However, 76% of the physicians responded that open surgery will continue to exist, even with advancements in medicine. Furthermore, over 90% of the surgeon expressed a desire to participate in a program for acquiring skills in surgery.

(Nishinohon J. Urol. **87** : 117-118, 2025)

key words : open surgery, laparoscopic and robot-assisted surgery era, questionnaire survey, young urologist